

平成 21年 3月 31日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19530517
 研究課題名（和文） 障害者の「リカバリー」に関する概念整理とケアマネジメントの実証的研究
 研究課題名（英文） Analysis of the Concept of Recovery in Care Management for Persons with Disabilities
 研究代表者
 小澤 温（OZAWA ATSUSHI）
 東洋大学・ライフデザイン学部・教授
 研究者番号：00211821

研究成果の概要：障害者の「リカバリー」概念の整理では、リカバリーは病気の回復を含んでいるが、それ以上に、人生の回復過程、主体性の回復過程などの意味を含み、病気の回復＝リカバリーという医学的な視点における意味とは異なることを明らかにした。アメリカおよび韓国における「リカバリー」概念に基盤を置いた実践に関する研究では、ストレングスケアマネジメントの研修教材の考察、精神障害者の地域生活支援の実践とその特徴の整理、を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：リカバリー、ケアマネジメント、障害者

1. 研究開始当初の背景

(1)1980年代以降、障害者のリハビリテーションの分野では、支援の目標として、これまでのADL（日常生活動作）からQOL（クオリティ・オブ・ライフ、生活・人生の質）への転換が言われてきた。さらに、精神障害者へのリハビリテーションでは「リカバリー」という概念が支援の目標として強調されるようになってきた。

(2)「リカバリー」の概念に関しては、普遍化されている定義はいまのところないが、「リカバリー」の方向性としては「希望をもつこと」

がもっとも重要な要因として指摘されている。

(3)この「リカバリー」に関する概念は、北アメリカの文化、自立観への価値意識などから生まれてきたという指摘もあるが、他方、北アメリカにかかわらず世界的な広がりのある価値観としてみる意見もある。

(4)「リカバリー」の概念は、障害者に対するケアマネジメントにも大きな影響を与えており、ケアマネジメントが、医療的なアプローチの強い従来のリハビリテーションモデルから、障害者自身の希望や潜在的な力を支援

していくエンパワメントモデル、ストレングスモデルに実践的な関心も広まってきている。その意味で、「リカバリー」の概念は、従来の保健医療、社会福祉における援助論の視点を、大きく変える可能性のある概念として位置づけることもできる。

2. 研究の目的

(1)近年では、特に、精神保健福祉を中心に、精神障害者へのケアマネジメントの効果のもっとも重要な評価視点として、「リカバリー」に着目されてきている。

(2)「リカバリー」に関しては、さまざまな考えや定義が提案されているが、これらの考えや定義を先行研究・文献により、整理をしたものがほとんどみられていない。

(3)「リカバリー」を促進するケアマネジメントのアプローチに関してさまざまな方法の紹介がなされているが、どのようなアプローチが真に有効であるのかについての理論的、実証的な検討はほとんどなされていない状況がみられる。

(4)本研究では、「リカバリー」に関する内外の先行研究、先行文献を検討しながら、その概念の整理を試みる。

(5)「リカバリー」を促進するケアマネジメントについて、実践を分析することによって、実践モデルの理論的な整理と実践的な課題の検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1)障害者の支援に関わる分野（リハビリテーション、ソーシャルワーク、ケアマネジメント）における「リカバリー」の概念を文献的に整理し、「エンパワメント」、「セルフヘルプ」などの概念との関係を検討する。

(2)文献的に整理された「リカバリー」の概念を用いて、「リカバリー」を促進する実践的なモデル（ストレングス・ケアマネジメントモデル、クラブハウス活動（セルフヘルプグループ））の分析を行う。（日本、アメリカ、韓国における実践モデルの比較もあわせて実施する）

(3)「リカバリー」を促進する実践的なモデルの分析を通して、その実践モデルの有効性と課題について整理を行う。また、日本、アメリカ、韓国における実践モデルの比較により、「リカバリー」の概念の普遍性についても検討を行う。

4. 研究成果

(1)「障害者のリカバリー」に関する理論文献研究として、「DeeganのRecoveryに関する論文の要点について」、「リカバリー：リハビリテーションの生きた経験」、「リカバリーと「働くこと」の意味」、「わが国における「リカバリー」概念の整理」の4つの課題を推進した。「リカバリー」に関連する調査研究では、「カンザス大学における精神保健福祉の研究動向」、「韓国における精神保健福祉地域サポートシステムの現状について」、「精神障害者の地域生活行動の実態と病気の回復過程における生活行動の再構築」の3つの課題を推進した。

(2)「障害者のリカバリー」に関する4つの理論・文献研究では、Deeganのリカバリー論の整理、精神保健福祉の歴史を踏まえたリカバリーの概念整理、就労支援におけるリカバリーの位置づけ、当事者の語りにおけるリカバリー概念の諸相について考察した。これらの結果から障害者の「リカバリー」概念の整理では、リカバリーは病気の回復を含んでいるが、それ以上に、人生の回復過程、主体性の回復過程などの意味を含み、病気の回復＝リカバリーという医学的な視点における意味とは異なることを明らかにした。

(3)「リカバリー」に関する3つの調査研究では、アメリカ・カンザス大学におけるケアマネジメントの研究動向を整理し、リカバリーに関する実証的な研究のあり方の示唆をえることができた。韓国における精神保健福祉地域サポートシステムではさまざまなタイプの支援システムの諸特徴を整理することができた。精神障害者の地域行動の実態調査を通して、行動の広がりとりカバリーとの関係进行分析することができた。

(4)課題としては障害者のリカバリーの実態の解明に留まり、リカバリーを促進するケアマネジメント実践との関係についての分析が弱かった点である。今後は、さらには、これらの研究成果をふまえて、これまでのケアマネジメント理論の整理分析を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計15件）

高原優美子、鳥羽信行、就労支援の援助技術に関する事例による考察、長野大学紀要、30巻1号、11-18頁、2008年、査読無
香田真希子、個別就労支援プログラ

ム I P S のわが国への導入における動向と課題、東洋大学大学院紀要、44号、259-278頁、2008年、査読有
香田真希子、働くことの意味、臨床作業療法、5巻5号、380-385頁、2008年、査読無
梶直美、香田真希子、松田美穂、今こそ必要とされるOTの就労支援、作業療法ジャーナル、42巻6号、509-517頁、2008年、査読無
香田真希子、医学モデルからリハビリ志向へのパラダイムシフト - 就労支援を实践して気づいたこと、作業療法ジャーナル、42巻3号、190-191頁、2008年、査読無
的場智子、小澤温、内田祥士、クラブハウスモデルによる精神障害者地域生活支援システムの現状と動向 - 韓国における実践事例から - 、ライフデザイン学研究、4号、467-470頁、2008年、査読無
望月美栄子、山崎喜比古、菊澤佐江子、的場智子、八巻知香子、杉山克己、坂野純子、こころの病をもつ人々の地域住民のスティグマおよび社会的態度 - 全国サンプル調査から、厚生学の指標、6-15頁、2008年、査読無
白石弘巳、本人・家族の回復に向けたACTスタッフのかかわり、臨床精神医学、1009-1013頁、2008年、査読無
小澤温、障害者地域支援のプログラム開発とその評価、社会福祉学、49巻1号、135-137頁、2008年、査読無
香田真希子、チャレンジを成功の糧にする就労支援のコツ - I P Sモデルの活用、精神科臨床サービス、7巻2号、268-272頁、2007年、査読無
白石弘巳、成年後見制度と精神医療 - 統合失調症の場合 - 、精神科治療学、122巻5号、595-598頁、2007年、査読無
白石弘巳、Understanding treatment attitudes toward dementia: Differences among community residents and health care professionals、日本公衆衛生雑誌、154巻4号、254-261頁、2007年、査読有
白石弘巳、認知症病棟の運営実態および在院期間の関連要因、老年精神医学、118巻2号、197-207頁、2007年、査読有
小澤温、障害者自立支援法におけるサービス体系と今後のあり方、発達障害研究、29巻3号、12-20頁、2007年、査読無
小澤温、アメリカにおける障害者ケアマネジメント、ケアマネジメント学、6号、55-57頁、2007年、査読無

〔学会発表〕(計 8件)

小澤温、高齢者と障害者のケアマネジメント、日本在宅ケア学会学術集会、2009年3月15日、堺市
香田真希子、久永文恵、高原優美子、白石弘巳、伊藤順一郎、精神保健従事者のリハビリ志向への意識変化を伴う研修効果に関する研究、日本精神障害者リハビリテーション学会大会、2008年11月23日、国立市
高原優美子、白石弘巳、小澤温、鳥羽信行、鈴木政史、長野県における精神障害のある人の就労に関する調査の一考察、病院・地域精神医学会総会、2008年10月24日、岡山市
香田真希子、中原さとみ、リハビリーを目指した新しい就労支援モデル、病院・地域精神医学会総会、2008年10月24日、岡山市
古山周太郎、小澤温、地域における障害者の生活実態 その2、日本社会福祉学会大会、2008年10月12日、総社市
小澤温、古山周太郎、地域における障害者の生活実態 その1、日本社会福祉学会大会、2008年10月12日、総社市
古山周太郎、精神障害者の地域での生活行動とコミュニティ意識に関する調査、福祉のまちづくり学会大会、2008年8月23日、新潟市
古山周太郎、地域で暮らす精神障害者の生活に関する一考察 - 生活行動の実態と回復過程における生活行動の再構築、日本地域福祉学会大会、2008年6月15日、京都市

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小澤 温 (OZAWA ATSUSHI)

東洋大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号：00211821

(2)研究分担者

白石 弘巳 (SHIRAIISHI HIROMI)

東洋大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号：80291144

的場 智子 (MATOBA TOMOKO)

東洋大学・ライフデザイン学部・准教授

研究者番号：40408969

木内 明 (KIUCHI AKIRA)

東洋大学・ライフデザイン学部・准教授

研究者番号：70298181

(3)研究協力者

香田 真希子 (KODA MAKIKO)

国立精神・神経センター・精神保健研究所

古山 周太郎 (KOYAMA SHUTARO)

奈良県立大学・地域創造学部

高原 優美子 (TAKAHARA YUMIKO)

長野大学・産業社会学部